



みろく

—MIROKU—

Kambara
Family

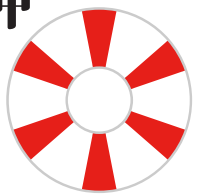
No. 17

2021年7月1日発行

夢を引き継ぐ者②

時代を先駆ける先取の精神

未来は、緻密な準備と一気呵成の行動力から生まれる



1957年の秋、常石の砂浜に造られた極めて簡易な船台の上で、長年の夢であった鉄鋼船（美小丸）を建造した神原秀夫の常石造船。美小丸の性能もさることながら、借入金金の保証人引き受け、積み荷の保証など、画期的な売り込み作戦も見事に当たり、常石造船には鉄鋼船建造の注文が次々と入りました。この年から翌1958年末までの1年強という短い期間に、船



神原秀夫肖像画（神原秀夫伝より）

台は5台に増えました。そして、これを休ませることなくフル稼働させて、11隻、4500総トンもの鉄鋼船を新造し、売上高2億6900万円を記録するなど短期間で大きな成長を遂げることになりました。

押し寄せる状況変化
地に足を着けた事業展開
を模索

●造船不況という魔物

新造船の建造ラッシュはその後も続き、地元である備後地域だ

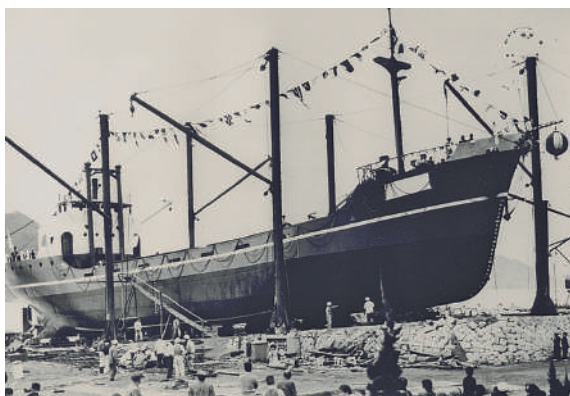
けでなく大阪や東京での造船営業も積極的に展開して受注量を増やしていきます。
もちろん秀夫は、この状況に満足することなく、本格的な船台の建造、施設や設備の整備と充実、技術者養成などに力を注ぎ続けました。こうしてわずか数年

で瀬戸内の、というより造船日本の中堅企業としての体制を揺るぎないものとしていったのです。
「満足」とか「立ち止まる」という言葉は秀夫の辞書にはありません。今まさに順風満帆の時だからこそ「次の一手を打つべき」という思いが秀夫の思考回路を刺激します。

次の一手とは何か、それは修理

ドックの建造です。船の需要、中でも新造船のニーズは景気動向に大きく左右されます。神武景気、岩戸景気といわれて活況を呈する当時の日本経済状況下では、製品輸送、原料輸送、エネルギー輸送の区別なく物流そのものが活発化して、それらの大量輸送を担う船、ことに新造船の重要は右肩上がり伸びていきました。

しかし、景気には波があります。やがて景気が落ち着き、物流が安定してきたら、あるいは不況が訪れて物資の動きが鈍化してきたら、新造船の



美小丸進水式

需要は減少していきます。常石造船が木造船を建造していた戦前も、鉄鋼船の中堅企業となった戦後のこの時期も、好況と不況という波はその法則を忠実になぞっていました。
事実、常石造船をはじめ造船各社が活況を呈していた1950年代から数年後、1960年代中頃から1970年代にかけて「造

船不況」が襲来し、名のある中堅の造船企業各社のクレーンには赤錆が生じ、やがて多くの会社倒産・廃業してしまうほどの状態に陥ってしまいました。

造船プラス修理・修繕事業への進出 揺るぎない企業ポジション構築のために

● サバイバルの切り札

秀夫が構想した次の一手としての修理ドック。それはまさに、いつか来るであろう造船不況をサバイバルするための切り札だったのです。

景気が悪くなれば物の流れは減少し、大量輸送を担う海運会社は新しい船を造る必要も余裕もなくなります。しかし、すでに運航している船の手入れや修理は必要です。そのために、船をドックに入れて点検・修理・修繕する必要があります。

当時の瀬戸内海には、小型鉄鋼船の修理ドックはわずかしかありませんでした。大阪や神戸から中国地方、九州を結ぶ瀬戸内海航路のほぼ中間点にある常石にドックを造れば、多くの小型鉄鋼船がここで修理・修繕を行うはずです。

確かにドックにおける修理・修繕で上がる利益は、新造船の建造に比べればそれほど多くはありません。それでも景気動向に左右されることなく、船さえ航行して

いれば、仕事は滞りなく入って来るはず。つまり、秀夫が構想した点検・修理・修繕ドックとは、やがて来るであろう造船不況を乗り越えるためには常石造船に欠かせないものだったのです。

● 修理ドックは順番待ち

常石造船の1号ドックは、全長70m、深さ3・5m、最大1200トンの船の出入りが可能なドックでした。秀夫が思ったように、ドック完成直後から修理・修繕の注文が次々と入り、順番待ちは当たり前のようにフル稼働しました。ドック完成・稼働の翌年である1960年の1年間だけでも、ドック入りの船舶は74隻、延べ3万6000総トンの船を修理・修繕したという記録が残っています。

また、この年（1960年）の実績を背景に、2号ドック、3号ドックを完成させ、さらに1961年には5号ドック、6号ドックと、わずか2年の間に合計5つのドックが完成し、それぞれがフル稼働するという活発なドック営業を展開していきます。

ちょうどこの頃から秀夫が予感していた不況の波がひたひたと足元を洗い始め、常石造船に限らず新造船の建造ニーズは目に見えて減少するようになっていきました。そんな中、景気に左右されずに仕事（修理・修繕）が入ってくるドックの運営は、常石造船の経営安定に大きく貢献することになりました。

● 経営も人づくりも、気長に 気短に

前号でも紹介した通り、一見豪快に見える神原秀夫という実業家の行動哲学。しかしそれは、緻密で気長な計画（未来予測、マーケティング、状況判断など）を土台として、チャンスが到来すれば気短に、それこそ一気呵成に具体的な行動に移すという独特の感性の上に成り立つものだったようです。

ただし、会社という組織は経営者1人の感性や行動力で運営されるものではありません。経営者の考えやそこから生まれる企業戦略を、行動力によって具体化する社員の存在が欠かせません。造船や修理・修繕などの技術面で10年以上も鉄鋼船改造で技術を磨いた造船技術者が、「ゴー」という号令のもと、速やかに秀夫の思いを具体化していきました。

また営業面では、若くして神原汽船の石炭輸送営業で鍛え上げられた多くの営業スタッフが、秀夫の企業戦略を忠実に実現するために、地元はもちろん東京や大阪にまで赴いて積極的に造船や修理・修繕営業を展開していったことも忘れてはならない要素です。

会社経営も人づくりも「気長に気短に」というのが秀夫の信条だったのかもしれませんが。



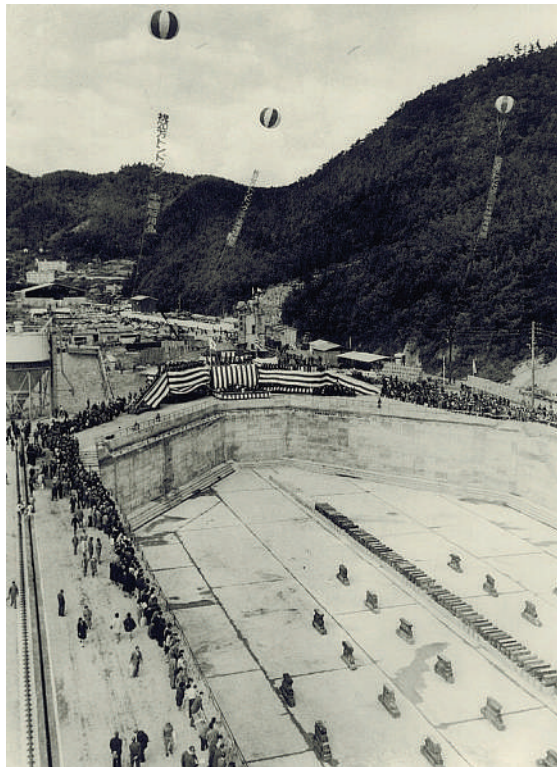
常石造船、設計室の風景

20万トンドック 船舶の超巨大化時代の到来 未来を見据えた奇想天外な計画

● 超大型船舶の時代に突入

吹き荒れる造船不況を修理・修繕ドックの運営で乗り越えた常石造船。ちょうどこの頃、世界の海運、造船業界では船舶の大型化が始まっていました。日本でもエネルギー関連では13万総トン級という超巨大なタンカーを運航する石油会社も現れました。これに刺激されたように造船業界の大手各社では10万総トンを越える超大型船舶の建造気運が高まってきました。

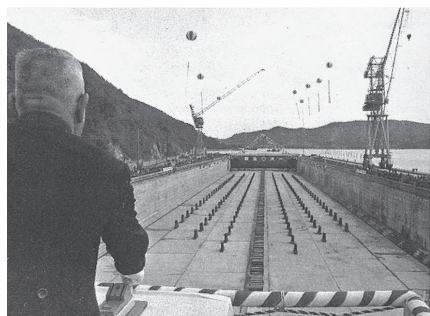
この動きをいち早くキャッチした秀夫は、ある計画をぶち上げま



20万トンドック完成式典

す。それは、「超大型船舶の修理が可能な20万トンのドックを持つ」という、会社関係者はもちろん、大手、中小を問わず造船業界全体が驚愕するほど荒唐無稽、奇想天外な計画でした。事実、これとほぼ同じ時期の1965年には、1万1000トンの船台と、7500トンの修理ドックの建設も計画して、スタッフとともに意思確認したばかりでした。

造船業界には、1万トン級の船さえ建造実績がない、ただか数千トン級の修理ドックしか持たない地方の造船会社が、20万トンクラスの修理ドックを持つなどと寝言を言っている、と笑うところさえありました。業界はさておき、本当に驚愕したのは、社員、役員を含めた常石造船関係者です。綿密な状況判断、緻密な計画、果敢



な行動力、これらを併せ持つ神原秀夫社長。この人が、一度口にしたことは、何があってもやり遂げなければならぬのです。

●常識外れのホラ話？

1万トンに満たない修理ドックしか持たない常石造船が、一気に20万トンドックを建造しようという見果てぬ夢のような計画の根拠

とは、どのようなものだったのでしょうか。秀夫は役員を前に、以下のように見解を述べています。

「すでに大手の石油会社、造船会社では船舶の超大型化が現実となっている。しかし、それらの船舶が修理可能なドックは、関東と九州以外にはない。先手を打って瀬戸内にこれを造れば、近畿、中国の需要は二手に引き分けられる。先手必勝とはこういうことを言うんじゃない」

これを聞かされた役員や関係者には、反対する者はいなかったようです。というよりは、賛成・反対以前に関係者は半信半疑のまま、秀夫の気迫に押し切られてしまったというのが正確な見方だったのかもしれない。

この20万トンドック建造計画を聞かされた1人に、若い頃から深い友情で結ばれた宮澤喜一氏（第78代内閣総理大臣）がいます。後年、氏は面白いことを話しています。

「造船や海運のことは何も知りませんが、秀さんから20万トンドックの計画を聞かされた時、半分はホラ話だと思っていました。若い頃から秀さんの人となりや経営の才能が尋常でないことは知っていま



宮澤氏（右）と談笑する神原秀夫

したが、それでも話があまりにも壮大すぎて、全体の構想を思い浮かべることはできなかったのです」

宮澤氏の語る通り、この計画は国や業界の理解を得るにはあまりにも壮大であり、あまりにも当時の業界常識とかけ離れたものでした。そのため、計画立ち上げ以降、国の許認可問題をはじめ業界の理解・協力を得るために、数々の苦難を強いられることになりました。

神原秀夫の常石造船は、20万トンドック計画遂行のために、どのような戦略を立て、どのような活動を展開していくのでしょうか。

神石インターナショナルスクール 開校に寄せて

末松 嗣夢さん



昨年4月6日、「神石インターナショナルスクール（JINIS）」が神石高原に開校しました。

世界各国から低年齢層の子どもを受け入れている欧州のボーディングスクールをモデルに、日本で初めて誕生した全寮制の小学校です。漢字、道徳など文部科学省が認定しているカリキュラムは日本語で、その他の科目は英語と日本語のデュアルランゲージで学べる学校です。5万平方メートル以上の広大な敷地には牧場を併設。生徒に新鮮な農産物と乳製品を提供する他、子どもたち一人ひとりがガーデンを持って植物や野菜を育てます。同時に、中国山地の自然を生かしたスキー、ゴルフ、乗馬、また瀬戸内のビーチやアートなど、四季を楽しむアクティビティで子どもたちの心と体の健康を育みます。

開校時よりボランティアとして学校運営に協力してきた末松嗣夢さんに、JINISの果たすべき役割や自身の考えなどについて寄稿いただきました。

「当たり前」に疑問を持つ

世代ごとに流行の変化が訪れるように、教育も次第に変化していくものです。今までの日本の学校の「当たり前」は、果たして本当に今後も通用していくのだろうか？ 毎日他の生徒と同じ制服を着て登校するこ



2021年度入学式@JINIS WINDS COURT

とが、本当に大切なことなのか？ 髪の毛を黒く染めていなければいけないのか？ 日本のこれからの教育において残すべき風習、そして変えていくべきことは何か？ 変化

とは、常に今の「当たり前」に疑問を持つことによって起きると僕は感じます。

常に変化に対応し続ける

最近よく耳にするグローバル化、多様化、持続可能性など、これから先10年、20年と我々の社会を構築していくテーマです。現代の流行だと思えば、JINISを開校するに当たって考えるテーマは、その先すらも見据えなければいけませんでした。

実際、僕が卒業したスイスのル・ロゼは140年続いている学校です。それはつまり第二次世界大戦に加え、第二次世界大戦、そして第二次&第三次産業革命も乗り越えてきたということ。その間にどれほどの変化が訪れたでしょう？ 学校とは、開校した後も常に調整しながら時代の変化に対応

し続けなければいけないということです。

多様な文化の中で育ち、関係性を築き上げるスキルを

ならば、2020年代以降の日本を背負っていく若者の人材育成とは、どうあるべきなのだろうか？ これから20年先も国際社会が存続することを考慮すると、日本はこれから他国と対等に渡り合うため、「コミュニケーション能力を身につけ、伝統文化を温存しつつ、日本という箱から羽ばたかなければならない。

JINISが小学生を対象とする最も大きな理由は、そこにあると考えています。観察力が最も優れている小学生の間に、日本語だけではなく外国語で会話をする機会を充実させ、常にさまざまな言語と触れ合う環境下の学校に滞在し、JINISの仲間とともに日々を過ごし、成長する。

そこには日本人だけではなく、世界中の国の生徒もこれからやって来るでしょう。現に韓国をはじめ、ネパールやシンガポール育ちのお子さんも（コロナ下にも関わらず）JINIS開校初年度から通っています。幼



JINIS WINDS COURTの新しいボーディングルーム

少期に多様な文化の中で育つことによって、さまざまな文化を嗜み、お互いを分かち合い、リスベクトし合える関係性を築き上げるスキルを、JINISの生徒が身



双忘での茶道のお稽古

広い世界を見て育ってほしい

JINISのもう一つの強みは、日本のお子さんが中学校を選ぶ際に選択を狭めないところです。バイリンガルのイメージジョン教育を提供しつつ、一条校（学校教育法第条に掲げられている教育施設）という文科省に認定された小学校であるため、海外を含め他の多数のインターと違い、JINISから日本の中学校にも進学できます。

受けられる教育の選択肢の幅を広げ、JINISの1期生には日本の小学生の誰よりも広い世界を見て育ってほしいと思います。JINISアドバイザーのRob Gray & John Baug先生の話によると、学校が本当の意味で価値を持ち始めるには、開校から10年かかるそうです。その頃には僕も30歳を越えていると考えると気が少々重くなりますが、楽しみです。



理科社会を複合的に学ぶJINIS TIME



プロジェクト学習のプレゼン

ぶらり訪問！⁽²⁾

神原家ゆかりの地

神原家に関係の深い場所を紹介するコーナーです。

Syuroken

ぶらり訪問、「秀路軒」 表千家の昔の姿を忠実に再現した茶苑

設計…中村昌生（本邦和風数寄屋建築界の最高權威の一人）
棟梁…野田善満（京都伝統建築技術協会会員。棟梁として活躍）
作庭…中根金作（世界的に有名な造園家）
落慶…昭和48年（1973年）8月15日



残月亭

秀路軒の由来

神勝寺の広大な境内には茶苑が点在していますが、その中心が「秀路軒」です。表千家の昔の姿を再現しようという神原秀夫と堀内宗完宗匠（茶道表千家宗匠）の企画で、天明の大火以来の姿を中村昌生先生の手によって忠実に復元されたものです。号は、神原秀夫と比路子夫妻に因んで竹田益州老師によって命名されました。

二畳敷の上段を備えた全体十二畳の残月亭の南側に三畳台



目の不審庵が接して建設、その南側に露地が作られています。内腰掛から、まっすぐ不審庵に向かつて茶苑が延びています。その右側には大きな枯池が横たわっています。この露地は中根金作先生のご指導で、見事に昔の姿が再現されました。

秀路軒の特長

不審庵…横に長い三畳台目（今の表千家不審庵と同じ）
前方に茶道口があげられる開き襖

突上窓

残月亭…二畳敷の上段床
十畳の座敷

踊り桐（残月亭と次の間九畳の欄間を通した）

九畳の間…二畳台目の向板の座敷

その外にあるのが簀子縁（竹を編んだすのこ）

鞘の間…残月亭の西側にある書院造の畳敷の縁側

屋根…柿葺、柿板（屋根を葺く時に用いるヒノキ、マキなどの薄板で屋根を葺くこと）

扁額…「秀路軒」竹田益州著



露地から見た不審庵

ファミリー予定

行事：ファミリー総会
開催日：コロナの状況次第ですが、8月開催を検討しています
行事：大般若祈祷法要（無明院本堂）
開催日：9月11日（土）11：00～（予定）

第5世代
リレー
エッセイ
Vol.7



今『本を読むこと』に夢中です!

第5世代の方に、自分が「今」
好きなものを自由に紹介してもらいます。

神原 千琴さん



私は今、本を読むことに夢中です!! 中高生時代は漫画をよく読んでいました。私が好きなのは少女漫画でしたが、家族の影響で少年漫画もよく読んでいました。漫画にはイラストがあるので、どの年齢層でも読みやすいと思います。実際に私も、漫画を読む時だけは集中できていました。しかし、小説などの文字だけずっと眺めているタイプの本はどうも苦手で、あまり手をつけたことがありませんでした。

本を読むきっかけになったのは、コロナです。コロナ禍で毎日特にやることもなく、携帯やテレビに張りついていました。そんな毎日を送っていたら、頭がおかしくなりそうでした。これはダメだと思い、買っては途中で読んで放置していた本たちを、最後まで読んでみることにしました。

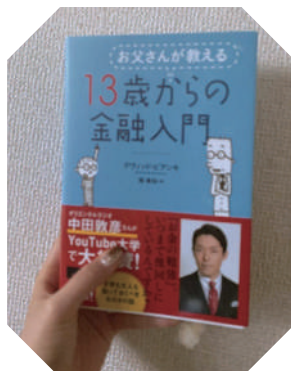
一度読んでみると意外に

止まらなくなり、気づいたら一日に3冊も読み切っていました。そこからは毎日数ページは読む習慣をつけています。難しい本はまだ読めません。挑戦して難しい本も読んでみたけれど、結局集中できず、内容もあまり入ってこなかったの、これでは本末転倒だと思い、まずは自分が読みたいと思った本を読むようにしています。

特に思い入れの深いのは、『ルビィ』という本です。これは、私の高校時代の恩師が私にくださった本です。私がこんな毎日にうんざりして落ち込んでいる時、先生がこの本をくださいました。私にしか分からないメッセージが、この本には込められています。この本を読み終わった時、自然と涙が出ていました。文字だけで、

こんなにも人の感情を揺さぶれるのは、すごいことだと思います。私が本にのめり込む理由も、ここにあるのかもしれない。

ぜひ、普段から本を読まない人にも、本を読む魅力をいつか分かって欲しいと思います!



>>> 次回は、
神原 小百合さんに
リレーします。
お楽しみに!

